
Etude 「ナウシカアとギムナンドロス」

宇治総

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Etude「ナウシカアとギムナンドロス」

【Nコード】

N3124H

【作者名】

宇治総

【あらすじ】

ムーサよ、語って下さい。輝けるイリオスを苦節の末に毀ち、大いなるトロイエを討ち亡ぼし、神の怒りを買って永く洋上をさまよった男の物語。ではなく、素っ裸で少女の群に単身乗り込んでいった、かの剛勇ギムナンドロスの物語を。

ナウシカアは戦慄した。目のまえ十尺先に立っている男は真つ裸であつた。

スケリ工島は平和であつた。その日もことさら海の荒れるでもない、大風が稔りを侵すでもない、父王は両手にあまるかの名高きパイエケス人の領主たちと混酒器を囲んで一杯機嫌、楽人は豎琴をかき鳴らして高吟し、兄たちは領主の持ち寄つた贈り物を両手に喜色満面、中庭では母后が女中たちを指揮して錘をあやつる。人びとものみな立働、牛のつがいが犁を曳き、陽の神工エリオスは彼らの黒い頭を日がな撫せてまわる。葡萄は摘まれ、大麦は挽かれ、乳と蜜とが甕から溢れた。

オリユンポスに住まい坐す、神々に祝福された国。スケリ工島は平和であつた。いや、「平和」を大洋に浮かべて、その上をオリウと羊の群と良き民とで満たしたなら、それはきつとスケリ工島と呼ばれるのである。

この島の住みびと、パイエケス人は働、きものぞろい。王女ナウシカアも例には漏れぬ。今日は侍女たちを率いて河で洗濯に精だし、前ごろ陽のあたる渚の際に色とりどりの布を干し終わったところである。

労働のあとには提供されてしかるべき報酬が待っている。乙女たちはめいめい巻衣を脱ぎ去って裸になり、河は労働の場所から一転、恰好の遊び場となつた。泳ぐものあり、水をかけ合つてはしゃぐものあり、美しい黒髪を丹念に洗うものあり、清水が玉肌のうえを滑り、陽を受けて陸離とかがやけば、心なき野の鹿も遠目に足を止め

る。

汗を流し終えた乙女たちは、今度はにぎにぎしく食事の準備に取りかかる。河辺の銀梅花ニルトラに木陰を求めれば、葉漏れ日ははあわく白き肌は侵されまい。馬車から運ばれる銀器が乙女たちの黄色い声にも負けじと欣々きんきんと鳴る。銀杯の葡萄酒を河水で割り、やわらかい麵麩マーザに蜂蜜をたつぷり、オリ―ヴ油に漬けた羊のチーズは味もよく、乙女たちはさんざめき楽しく空腹を満たした。輿に乗じて鞠をとる侍女があれば、王女は咲わらい唱うたって拍子をとる。そのさまはあたかも花芽ぐむ野辺に戯れる妖精ニユムラの群か、その中でも汀立みぎわたつるわしき王女ナウシカアを、処女神アルテミスと紛わずに済むのは、ひとえにその手を弓箭ゆみやが飾らぬからであろう。　　さまで美々しき景観を隠され

ては、さだめし太陽エエリオスもかの白き花樹を憎もつというもの。
とまれ数刻ののち、にぎわしい会食は王女の音頭でおひらきになった。乙女たちはめいめい洗濯物を拾ってまわり、王女は放してあった驟馬を集めて軛くびき、馬車の輪留めを外す。　　侍女たちの悲鳴に驟馬の耳がぴんと立ったのはその折である。

洗濯物を河に落としたのかしらと王女が振りかえれば　　なんと
いうことであろう、十尺先に全裸の男が立っていたのであった。ちなみに葉っぱでマエとウシロを隠している。

「高貴なおかた！　どうか恐れがおみ足を鞭打ち、あなた様にそな
わる深いお慈悲をいたずらに持ち帰らせることのありませんように
！」と、男は言った。「目の前の憐れむべき男は、お姫さま、いま
こうしてあなたさまのお情けにおすがりしております」

低く艶のある声である。まったく美声といってもいい。いいが、
問題は出所であった。

(パイエクス人ではないわ……)

件の男、ただなにも纏っていないだけというのではなかった。髪
といい髭といい、首から上の毛という毛が悉皆しっかいおたがいを見限つて
逃散をくわだてている。ひと言でいうと、肩のうえに巨大なウニが
据わっている。その下の胸毛といえば三者三様枝分かれして、いび

つな三叉矛の浮彫のようである。そのあたりの灌木から聳ったおぼしき枝葉を両手に、こころもち前ごごみになって股間と尻とをそれで隠している。ちなみにこう書いておかないといういる差し障りがあるのであえて強調するのだが、その守りは完璧である。

(野蛮なひとではなさそうだけれど) 男の言葉はたいそう礼儀正しかったので、ナウシカアは少し肩の力を抜くことができた。(なんというか、ものすごい恰好だわ。なにがあつたのかしら。なにがあつたらこうなるのかしら……)

王女はひと言だに発せず、ただおっかなびつくり男を観察している。侍女たちといえは、おのおの遠巻きに手にした洗濯物を揉みながら、忽然とあらわれた獣のような男が大切な王女さまになにか怪しからぬことをしてかさないかと戦々恐々の態である。

男はじきにふたたび口をひらく。「あなたを神さまと見間違えた」とか「まるでアルテミスのように」とか「あなたのような麗人を子どもに持ったご家族はギリシア世界いちの幸せもの」とか「しかしそれもあなたを娶る男には遙か及ぶまい」とか「あんまり神々しいお姿なのでお膝にお縋りするのが畏れおおい」などなど、微に入り細に穿って挨拶の続きを陳べだした。まったく礼に適った物言いではあつたが、適えばかなうほど見てくれとの懸隔が激しくなつて滑稽になるばかりである。さすがに膝に縋れないのは別の、それも緊急の事情があつてのことであろうとは、一見の王女にすら見当はついた。つまり両手を別の用途に持つて行かれると、そのなんというかナニがアレして大変なことになるのだろう。

「お姫さま、今わたしは大変な憂き目に遭っています」

「ええそれは……わかりますとも。その、見ればわかります」と、ナウシカアはようやく返事をした。

(ほんとうに、見ればわかるわ)

驚きから覚めてみれば、なるほど男の訴える窮状が抜き差しならぬものであることが如実にうかがえる。見れば丈たかい堂々たる偉丈夫だが、その裸身は余分な肉がすっかり削げ落ちてひよろりとし

ており、影なす筋ばかりが目立った。砂と赤土と落ち葉がくつついた顔は、件のウニあたまのおかげで見目形こそはつきりしないものの、数多の困難と苦痛の傷跡もあらわにげっそりと面糞おもやっれしていて、昏い瞳には憐憫を乞ういろが隠れもなく明らかである。先程からやたらとごころ音の鳴るのは、霹靂かむとけもてあそぶ大神ゼウスの神意の表明でないとしたら、けだし男の腹の虫のなせる業であろう。それでも平身低頭していながら卑屈に見えないのは、なんとも不思議なことであった。

「オギユギエの島を出航してより十を倍する日々、大熊座アルクトスの瞬きを頼りに、わたしの筏は黒い水面を切ってはるばるお国まで遣つてきたのですが、陸地まであともう少しという三日前の晩、雲は星のしるべを隠し、にわかにかこつた嵐は堅牢な筏をたやすく粉碎し、わたしをして鯨波けいはのただ中に自らを投げ込むことを余儀なくさせたのでした。おお、大地ゆるがすポセイダオンの怒りの、かくも凄まじきものかは！ 大洋を攪拌する神の矛は二日二晩、わたしを山谷のごとき怒濤のうちにもてあそび、わたしの体からすべてを立派な男が具えていて然るべき力と、財産と、女神の織りなしたみやびな衣とを奪つていったのです。かかるいぶせきありさまをお姫さまがたに本意ならずさらした、これが偽らざるわたしの顛末です」

「まあそれは……なんてかわいそうなこと。たいへんな目に遭われましたね」

ナウシカアは実のところ、話のすべてを信じたわけではなかった。というのも、彼女の常識の範疇に二日ものあいだご飯を食べずに海に浮かんで、なお生きている人間というのはちょっと存在しがたかったのである。難破してすべてを失ったというが、もう取り返しよのない事柄であるから、最初からなにも持つていなくても同じように言えることだろう。しかしかといって男は嘘をついているようにも見えず、またその口調は誠実かつ迫真の響きに彩られていたのだ、王女はこれを聞いてたいそう憐れを催した。

「いずれかの神霊ダイモンがわたしをこの島へ打ち上げたのか……しかしき

つとまたここでもおおいに苦しめてやろうというお心積もりなのでしょう。というのも、それが他人の愚かさからであれ、万やむを得ずわたしが為してきたことへの報いであれ、そしてもたらされるものが賞であれ罰であれ　おそらくは専ら罰のほうではありましようが　神々がわたしをこのままにしておくとはとても思えないからです。見た目からは想像できないかもしれませんが、わたしはそういうった経験をたくさん積んできた人間なのであって、ですからわたしの苦難がこのあたりで終わるとはとうてい思えないのです。そうなる前に神々はいろいろなさるに決まっています。　どうかお姫さま、身にまとう布ひときれすら持たぬ男に一掬いっくの憐れみを。寄る辺も繋累のひとりとてもなく、自分がいま立っている場所の名前すら知らぬ男に一臂うひの援助を」

（まあ……ほんとうに聞いていると涙がでてきそう！　すっかり悲観的になってしまつて、こんなにかわいそうなひとが未だかつてこの島にいたことがあつたかしら）

王女の憐れみはなおいつそついや増した。いや増したが、やはり男の話に信じ切れぬところはある。ほんとうに見た目からは想像もできない類のことで、このあわれなウニうにあたまた氏が良きにつけ悪しきにつけ、神々の注意をさかんに惹起しきするなどはとうてい思われない。さだめし身にあまる不幸が一斉に襲襲いかかってきたので、男は悲観のあまり自らの前途にあるはずもない暗がりを見出しているのだらう。

「見知らぬおひとよ」と、ナウシカアは優しく声をかけた。「言うところを聞いてみても、あなたがだれその召使いであるとか、どこそこの雑役夫であるなどはとうてい思えません。賢さというものはそのひとの言動が証すのであって、身に纏まとっているものがそうするのではないのですから、あなたが素性の卑しいひとでも愚かなひとでもないということ、わたくしたちもよくわかっております。そしてそういうひとがいつまでもひどい目にはかり遭あつはずもないということも。オリュンポスを知ろしめす大神ゼウスは、人びとに

禍福を下賜くだされるにその貴賤も知愚をも問わず公平になさるのですから、あなたは辛くとも一時の不幸をじっと耐えなければなりませんよ。そののちには必ず幸せが待っているのだし、勿論、あなたの知らないこの島でそれに巡り会えないと決まったわけではないのですからね」

「ありがとうございます、お姫さま」と、男は感謝した。疲れてはいても、その声はようやく射し入った希望の光に明るんでいる。「この島に来て始めて遇ったひとがあなたで、ほんとうによかったと思います。それともお国の方々はみなあなたとひとしなみに親切なのでしょうか。その素晴らしい人びとは、彼らの住まうこの国はなんでしょうか。その素晴らしい人びとは、彼らの住まうこの国はなんでしょうか。そしてあなたのご尊名は？ お見かけから察するに、さぞやんごとないお生まれではありませんでしょうか」「教えてさしあげましょう」と、王女は請け合った。「この島はスケリ工島といって、この島に住まう人びとはパイエクス人といいますが。彼らに聞けばわかるでしょう、彼らを統べる王はナウシトオスの裔すえアルキノオスという名前で、彼にはナウシカアという娘があり、彼女はもしパイエクス人が渚で異国のひとに遭遇したとしたら、自分とまったく同じように親切に接するはずだと信じているということとを」

男はたいへん感じ入って、王女に丁寧なお辞儀を返した。とたんに男の横合でもじもじしていた侍女のひとりがキヤーと叫んで後を向いた。男はすばやく葉っぱを駆使する。まったくそちらの方面での彼の守りの堅さたるや、かの輝けるイリオスを堅持して、能くよアルゴス勢の猛攻を禦ふせいだスカイア門にも喻えられようほどのものであったが、しかし実は木馬の奇計をもつてかの門の毀こたれるをまねいたのは、他ならぬこの男であったりする。奇しくも要衝を欺あそかれるの悲劇を、彼は被害者側という立場から追体験するはめに陥ったのであった。　　なんだかごちゃごちゃ書いて、いったい何が言いたいのだと思われる読者もあるうが、まあつまりその、見えちゃったのである。彼はかつて一人息子の立派さを衆人に漏らして憚らな

かったものであるが、下の息子もなかなか立派であった。

「なんですアカルタエ、大きな声をだして！」と、王女は侍女を一喝して、ついで王女と男を遠巻きにしている娘たちに向かって高い声をあげた。「皆もよ。おまえたちはなにかからそんなに怯えて逃げ回るので。このひとがなにか良からぬことをしでかそうとしているなどと思っているのなら、ほんとうにおまえたちは居もしない羊飼いが投げた、ありもしない杖に追い立てられているのだわ。このひとが善良なひとか悪質なひとかは先程はつきりと証明されたのだし、それは神々も先刻ご承知のことです」

王女がこのように叱責すると、娘たちはみな恥じ入ったようにそろそろと輪を縮めるのだった。

「見知らぬおひとよ、あなたのお名前を教えてくださいませんか？」

王女のにこやかな問いに、男よ、お前はこう言ったな。

「王女ナウシカアよ、わたしは裸キムナントロスの男です。なにひとつ持っておらず、したがって身に纏わるなにごとをも証明し得ない彼を呼び慣わすに、これいじょう適当な名はありますまい。少なくとも今は、わたしのことをそう呼び下さいますよう」

（よくよく奥ゆかしいひとだわ……見た目はこんなだけけど。なぜゼウスはこんなな心の清いひとをひどい目にお遭わせになるのかしら）

いまや王女の憐れみはかつてないほどに募った。募ったが、心の隅では男が本名を名乗らないことについて、罪のないささやかな邪推を働かせもしていた。つまり名乗らないのは、名乗れないからではないか？ たとえば罪を受けたひとで、その名が知れ渡ればたちまち両手に枷かせをこうむる身の上であるとか？

「アカルタエ」と、王女はギウムナンドロスの近くに立っていた娘を手招いた。「ギウムナンドロスに着るものを差し上げて。わたくしの兄ハリオスの衣で、生成きなりの丈夫なひと揃いを」

アカルタエは馬車に飛んでいってしばらくこそそしたのち、洗濯したばかりの衣を携えて戻ってきた。ギウムナンドロスにそれを

差し出そうとしたのだが、差し出す手のないことにはたと気付いて（ついでに差し出してしまったときのことをまざまざと想像して）真っ赤になった。

「ありがとうございます、お女中ならびにナウシカアよ」と男は言うのと、ウシロを隠していた葉っぱを地面に落として、へどもどしているアカルタエの手からすばやく衣を受け取った。嵐の速さでそれを体に纏いながらいわく、「……わたしはこの衣よりずっと手間も金もかったものを所有していましたが、今ではなんとこれほど素晴らしいものを身につけたことはなかったように思えます。たとえ王侯がどれほど贅を尽くして華麗な衣をあつらえたとしても、けだし持たざるものが手に入れる一疋いっぴきの布にまさる喜びは得られますまい」

ギウムナンドロスの喜びようは、ナウシカアとアカルタエの心に彼が感じたものと同量の歓喜を呼び起こした。よいおこないが正しい礼儀をもって快く受けられたときは、たいていこのような素晴らしい報酬が待っているものである。娘らはにこにこ笑っていたが、しかし実のところギウムナンドロスの長外套ヒマディオンはつんつるてんで、彼女たちの笑いのうち三割くらいは「ウニあたまで寸足らず」の滑稽さに起因するものであったことも、忘れずに付け加えておかなければならない。

「アカルタエ」と、王女はギウムナンドロスの横で笑っている娘をふたたび手招いた。「今度はギウムナンドロスになにか食べるものを。残りものしかないけれど、こしらえて間もない麵麩と羊のチーズと、油漬けの小魚があつたわ。それに葡萄酒もね」

アカルタエはふたたび馬車に飛んでいってこそぞ遣りだすと、枝籠に入った食べ物と葡萄酒の壺びんを携えて戻ってきた。

「ありがとうございます、お女中ならびにナウシカアよ」と男は言うのと、よほど腹が減っていたものか、侍女が食事の用意をする先からひよいひよい手を伸ばして、いくら詰め込んでも満たされぬひとのように飲みかつ食うのであった。「ああ、空腹に勝る調味料があ

りましようか！ にはなくともそれだけはたくさん持っていますから、今のわたしには一片の麵麩マザーもひとすくいエトノスの豆粥トノスも、さしずめ大御食アマプロシヤに等しいのです。ああうまい」

ギウムナンドロスはのどを鳴らして葡萄酒を呷あおっている。王女ナウシカアの憐れみたるや炸裂寸前で、ついでに侍女アカルタエも「ウニあたまの寸足らず」氏がわさわさ飲み食いするさまを目の当たりにして、おおいなる憐憫の情に奇襲おされていた。

あらかた食い終えて籠の中身もなくなると、ギウムナンドロスは折々感謝の言葉を陳べつつ、頭をがりがり掻きだした。次いで髭、胸毛を同様にがりがり。見ればどうやら、それらがとんでもない形に納まつているのは、こびりついた潮のせいであるらしい。

「もし、ギウムナンドロスよ、べとべとして気持ち悪くはありませんか？ お顔もたいそう汚れております。あなたが衣を着けるまえに気付くべきでしたが、水浴なさったほうがよろしいでしょう」

「はい。先程までは気にもなりませんでしたが、衣食が足りて始めてそのことに心が向くようになってきました。どうもわたしはひどい態なりをしているようだ」

王女は控えめに同意したあと、みたび侍女を手招いた。

「アカルタエ、わたくしの長櫃ナカのなかにオリーブ油の入った小さな壺があるわ。それと乾いた布を持ってきて。ギウムナンドロスに水浴させておあげなさい」

アカルタエは王女の命を受けてみたび馬車へ飛んでいく。黄金の油壺と羊毛のひろい布を携みえて戻ってくると、やや困惑ていの態のギウムナンドロスをしきりに汀みぎわへ促した。

「お女中どの」と、ギウムナンドロスはさも言いにくげに切り出した。「王女のお言いつけではありませんし、わたしは自分で体を洗いますし、自分で肌に油を塗りもしますから。あなたのようなお若い娘御に裸身をさらすのは実に忍びないのです。ましてその、一度ならず二度もそうするのは」

アカルタエはまったく、そのまま発火炎上して人間たいまつにな

るのではないかと危ぶまれるほど真っ赤になった。ギウムナンドロスの足下に壺と布を置いて、あわれ彼女は一目散に王女の元へ走り去る。その赤さたるや彼が水浴しているあいだ中、ナウシカアをして侍女の顔が熟して落ちてしまふのではないかと恐れさせるほどであった。

「ああ、戻ってきましたね」と、ナウシカアは手庇をつくった。すっかり綺麗になったギウムナンドロスが汀から上がってくるころであった。

「ありがとうございます、お女中ならびにナウシカアよ」男は今し甦ったひとのようにさっぱりとした様子である。「まさしく生まれ変わったような気がしております。肌に油を塗るのもずいぶん久しぶりで、つい先程まで潮と痛苦とに痛めつけられてがさがさしていたものが、今ではなんとつやつや輝いていて、ほんとうに自分の肌とは思えぬくらいです」

「おお、ギウムナンドロスよ」と、王女は感に堪えかねたように言った。「お召しの上は文が合っておりますでした。荷物の中からもつすこしあなたの背丈にふさわしいものを見繕いましょう」

ただちに馬車へ駆けようとするアカルタエをきびしく呼び止めて、王女は自ら馬車へ飛んでいき、金糸で飾った貝紫染めのみやびな衣を携えて戻ってきた。これは彼女の長兄ラオダマスのもので、持ってきた中ではいちばん高価な代物である。

「このような高価なものを、よろしいのですか？　これはあなたの父王アルキノオスカ、丈たかきご兄弟がたのいずれかの所有にかかると、その中でも特に丹精された逸物に違いありません。もしそうでなければ、このスケリ工島に住まう人びとはつまらぬ小作人でもきらびやかに装い、王侯のような態をしていることになりすから」

「ギウムナンドロスよ、どうかお受け下さい！ あなたの文に合うものがこれしかなかったのです」

「ありがとうございます、ナウシカアよ」と、男はちよつと恐縮して言った。「なんと美しい織！ 女神カリユプソがわたしのために織ってくれた美々しき衣に、しかしこれは勝るとも劣りません。ほんの数刻前まで灌木の根元に打ち臥していたみじめな男が、まったく今これほどの変貌に見舞われようとは！」

（このひとはまさしく、神とお付き合いのあるかたなのだわ……）

このひとはきつと、神々がなにかの思召しによって島を訪わせたのに違いない。ナウシカアはギウムナンドロスの言葉を聞きながら、たいへんな感動を覚えた。

「おお、ギウムナンドロスよ」と、王女は感に打ち震えながら言った。「先程のもので足りなければ、食べ物がまだ少し残っております。よろしければ用意いたしましたしょう」

ただちに馬車へ駆けようとするアカルタ工をきびしく呼び止めて、王女はふたたび馬車へ飛んでいき、乳と蜂蜜とで練られた白い麵麩と油漬けの牡蠣を枝籠にいれ、古くて上等な葡萄酒の壺を白い腕に携えて戻ってきた。

「この香り！ よい葡萄酒のようですが、これはあなたのために用意されたものではないですか？ というのも、もしこれほどのものが仕えびとや貧しい異国人などに易々と振る舞われるのであれば、まったくわたしは漂流するうちにギリシア^{ヘレス}世界から遠く離されて、アイギス持つパラス・アテネはギウムナンドロスを神の島へ打ち上げたということになりますから」

「ギウムナンドロスよ、なにとぞお受け下さい！ 皆であらかた片付けてしまったあとで、これしか残っていないのです」

「ありがとうございます、ナウシカアよ」と、男はすっかり神妙になつて、肅々と麵麩に手を差し伸べた。「この白い麵麩はわたしに故郷を思い出させます。佳肴^{かじょう}はとかくよい思い出に結びつきますし、よい思い出はえてして故郷に蓄えられるものですから。岩群^{いわむら}ごし

きイタケとエエリオスの寵あつきこのスケリ工島とでは、あまり似つかないのではありますが……」

（おかわいそうに、遠い故郷を想って悲しんでおいでなのだわ。ほんとうにこの島がこのひとの故郷になればどんなにかいいだろう！）

王女は男の言葉にちくいち頷きながら、自分の杯にきらめく葡萄酒を注ぎ、それに大麦の碾割粉と蜂蜜、薄荷、罌粟を混ぜ合わせて、彼のために甘露キユケオンを調合してやる。娘たちの輪は当初からは考えられないほど狭められ、侍女アカルタエはそわそわと落ち着きがない。杯を受け取ったギムナンドロスが王女にあらためて感謝を陳べ、それを干した。彼の反り返った喉にいつせいに集まる、娘たちの視線。

（さあ、これからどうしようかしら。このひとを館へ伴って、父王にぜひ会っていただいて、母后にも挨拶をしていただかなきゃ。ああ、兄上がたがこのひとを見たらなんと言うかしら。このひとを伴って帰るわたくしを見て、パイエクス人たちはなんと行って噂するかしら！）

王女は男を伴ってすぐさま帰路につくか　それとももういちど水浴を勧めてみようか、目下思案中であった。

この一編を見そなわすオリュンポスの神々、ならびに通りすがりの読者諸兄よ、どうか王女ナウシカアの突然の変心を訝いぶかしみ給うな！　というのもこのギムナンドロスという男、スケリ工島ではちよっとお目にかかれないほどの美男だったのである。

(後書き)

ウニあたまのまま館に連れて行かれたら、ホメロスもさぞやりにく
かったに違いない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3124h/>

Etude「ナウシカアとギムナンドロス」

2010年10月8日15時09分発行